

研究発表会報告

昭和62年度大学院研究発表会が下記のように行なわれました。

時：11月1日（日） 10：00～12：00

場所：神学館チャペル

司会：布引万佐代・佐保直美

William Golding の *Free Fall* における罪と宥しについて

布引 万佐代

William Golding の *Free Fall* は、収容所の闇の恐怖によって自分の内にある闇を見てしまった主人公 Samuel Mountjoy の告白小説である。告白をして宥しへの第一歩を踏み出し、自分は恩寵に満ちた世界に再生したと自覚しながらも、主人公は罪の意識から逃れることが出来ない。つまり宗教にも科学的合理主義にも救いの道を見い出せず、宙吊りの状態にいるのである。

作者はこの状態を *Free Fall* という題名に象徴させ、安易な結論を出さずに作品を締め括り、同じテーマを次作 *The Spire* でも追求している。

コメント

発表者は、*Free Fall* が Golding の一連の作品の中でどのように位置づけられるか、また、どのような内容の作品であるかを簡潔に述べられたあと、この作品の提示する問題——特に、20世紀人が科学にも宗教にも救いを見出せないでいること——について明快に説明された。指導教授からは、主人公の宙づりの状態、及び作者の女性描写の稚拙さについてコメントがなされた。

(田村 章)

Dombey and Son : 人間の isolation とその克服

玉井 史絵

Dicken は *Dombey and Son* において、同じ主題の繰り返しという技法を用いることによって、作品全体に統一を与えることに成功している。今回の発表では繰り返し現れる主題を人間の isolation とその克服ととらえた。

Isolation はこの作品では、閉ざされた部屋と難破船という2つの image によって表されている。主人公 Mr Dombey の閉ざされた部屋での isolation はこの作品の主旋律である。そしてそこに、会社の仕切りを打ち破る Mr Morfin や難破船から救われていく Florence と The Wooden Midshipman の人々らの subplot が組み込まれて、孤独の世界から人と人とのつながりを回復した世界へという、作品全体の動きが示されているのである。

コメント

発表の後、Dickens におけるユートピア的コミュニティはしばしば血のつながりのない人々の間で建設されるがそれは何故かという質問がなされた。発表者は Dickens の恵まれない幼少年時代の経験からの両親への不信感のためであろうが、Dickens が真に求めていたものは、血縁によるコミュニティ、すなわち“家族”というものではないかと答えた。(玉井 久之)

Mark Twain の *Pudd'nhead Wilson* に関する一考察

筑後 勝彦

Pudd'nhead Wilson には作者 Mark Twain の社会や人間に対する痛烈な批判が見られる。作者はまず南北戦争以前の奴隷制社会を舞台背景にすることによって、19世紀の黒人差別そして miscegenation といった社会悪を暴露している。次にこのような悪が生み出した怪物 Tom に、南部貴族 F. F. V. の貧欲、残酷、卑劣、臆病といった真の姿を象徴させている。さらに社会の因

襲に妥協して成功してゆく Wilson の姿を通して、社会環境が持つ力の大きさを描き出している。

コメント

発表者は発表時間の関係から、Mark Twain 論の一断面として、*Pudd'n-head Wilson* における作者のペシミズムについて、網羅的かつ説得力のある発表をされた。コメンテーター側からは、発表者の研究意図の完遂のために他作品との比較分析が期待されるとの見解が示された。また、何故 Mark Twain はしばしば数十年前の社会に作品のセティングをとるのか、という質問がなされた。発表者の今後の研究における clue の一つとなろう質問であった。

(森下 和彦)